カンボジアで教えられたこと

田辺奈緒（武蔵大学社会学部社会学科）

1. はじめに

この選挙監視活動に参加するまで、カンボジアという国についてほとんど何も知らなかった。カンボジアに行くという実感がわいたのは第一回目の研修のときにクメール語を教えていただいた時であった。今回のミッションで、選挙監視活動についてだけではなく、とても多くのことを学んだ。見るもの、聞くものすべてが新しく、知らないことばかりだった私にとって、日本で同じ時間過ごしていてもとても得られないような刺激をたくさん受けた。今回のミッションを通して感じたことを、選挙監視活動と交えてまとめてみたい。

2. ブリーフィング

ANFREL のブリーフィングは英語がほとんど聞き取れなった私にとってはつらかった。同時に英語ということばの力の大きさを痛感した。英語を話すことができれば、本当にたくさんの国の人と話せるということを実感した。ANFREL には様々な国から監視員が来ていて、大げさだけれども、世界の縮図というような印象を受けた。初めてこのような活動に参加させていただいて、自分は勉強不足だったと感じた。そんな自分が、あちこちの違う国から集まってきた方々と一緒に、選挙について英語で説明を受けていることに改めて気づいたときは信じられないような気持ちだった。

3. 任地展開

7月 23 日、各々が任地へ向かって出発した。私はコンポンスプーで選挙監視活動を行った。コンポンスプーはプノンペンから車で 1 時間ほどなので、25 日まではプノンペンから通うことになっていた。コンポンスプーへはプノンペンの中心地を出てからはまっすぐな一本道だった。両側は畑で、ちらほら牛の姿も見えた。畑だけではなく、外資系の大きな縫製工場もあった。ここでは、主に 20 歳前後の女性が働いているということだった。コンポンスプーでの私たちのチームの戦略は、ひとつは、インターバンドが行っている除隊兵士支援活動を通してあらわになった問題点を元に監視することである。具体的には政府の囲い込みがおきた地域でどのような投票行動が起きるかということに着目しようということがミーティング話し合われた。そしてもうひとつは、縫製工場の労働者の投票行動についてである。コンポンスプーチームは二つに分かれ、私たちは縫製工場の労働者が投票すると思われる地域の監視をすることになった。

23 日、私たちはまずコンポンスプーにあるインターバンドのオフィスに行き、インターバンドのローカルスタッフの方々や、通訳の方々と対面した。選挙監視活動をする間、インターバンドのオフィスをミーティングなどで使わせてもらうことになっていた。オフィスの中には、除隊兵士支援活動を行った家族の写真がたくさん貼られていた。その後、COMFREL に行きコンポンスプーの状況をうかがった。コンポンスプーには 17 の政党がある。そのうち CPP、サム・ランシー党、フンシンペック党と Indra Buddra City Party(I.B.C)がコンポンスプーでは 4 大政党となっているという話だった。

24 日はミーティングをした後、コンポンスプー州の第三副知事にお話を伺った。その役所の目の前に CPP の大きな事務所があったのが印象的だった。その後、地域の NGO、National Centre of Disabled Persons(NCDP)を訪問した。ここでは、紛争などにより傷ついた人たちを支援している。具体的には目の見えない方に情報を知らせたりしているという。代表者の方は CPP、サム・ランシー党、フンシンペック党は、ハンディキャップを持つ人を援助する、という政策を言及しているが、他の小さな政党はそのような政策は掲げていないと言っていた。また、大人で精神病の重い人は力の強い政党の意のままになりうると言っていたのも覚えている。

25 日、選挙キャンペーン最終日、プノンペンからコンポンスプーの PEC に向かう途中、何台ものキャンペーンカーとすれ違った。23 日、24 日はあまり天気が良くなかったせいか、キャンペーンカーをほとんど見かけなかった。しかし、この日は最終日ということもあり、たくさんの選挙カー（トラック）や拡声器で演説か何かを流している政党事務所を見かけた。トラックの荷台に政党のキャップをかぶった人がぎゅうぎゅう詰めになって立って乗っていた。多いときには、7～8 台の列になって走っているトラックもあった。

PEC に着くと、代表の方にお話を伺ったが、しばしば携帯電話が鳴り、とても忙しそうであった。そして午後はいくつかの投票所を見て回った。投票所となるあるお寺では、まだ寺のどこを使うか決まってないとのことであった。前回の選挙で投票所になったところを見せていただいたが、とても小さな場所であった。CEC から投票所へはまだ情報や物資が届けられていないということだった。次に見に行った学校では、投票所のスタッフのトレーニングをしている最中だった。投票所のスタッフは、公務員や CEC のオフィスの人、先生などが採用されているということだった。後に、コミューンによってトレーニングの期間が違うということもわかった。そして、17 時から Cambodian League for the Promotion and Defense of Human Rights(LICADHO)で NICFEC や EU の国際監視団などとの合同ミーティングに参加した。ミーティングではコンポンスプーの地図を元に、各自が監視する地域について他の監視団との調整をした。

26 日は一切の選挙キャンペーンが禁止となっていた。Quiet day が quiet ではないということも聞いていたけれども、プノンペンからコンポンスプーへ向かう間も選挙カーなどは見かけなかった。選挙法が守られていると感じた。Voasa コミューンの CEC オフィスに行き、メンバーのひとりに会った。ほとんどのスタッフは投票所に出払っているという。その後、投票日に自分たちが監視して回る投票所の下見に行った。物資は届いており、たいていはその投票所のチーフが管理していた。いくつかの投票所では、26 日の夜から投票日の朝にかけて、スタッフが投票所に泊り込むというところもあった。不安な点もいくつかあった。Chbarmon コミューンで訪問した投票所は、洪水が問題となっていた。道の途中に池のように大きな水溜りができていたり、増水すると投票所まで浸水してしまう可能性もあるということだった。もし増水したら、場所を変えて投票を行うことも考えていると言っていた。

そして 27 日、投票日がやってきた。私たちのチームは 9 箇所の投票所を監視して回った。投票所を開ける時と閉める時は、同じ投票所を監視した。開場を監視した投票所では、投票用紙の不備により、投票開始時刻が 30 分ほど遅れた。開場を待つ人たちは長い列を作り、しかも前へ前へと押し寄せてくるので、ぴったりくっついて並んでいた。先頭の方は女性が多く、赤ん坊を抱いた母親が優先され 1 番の投票者となった。その後は順調に投票所を回っていった。ある投票所では同姓同名の人が二人いて、誕生日までチェックをしていなかったために、まだ投票してないはずの人に投票済みの印がつけられている、と問題になっていた。数十分もめていたが、投票所の不備が確認されたので、その有権者は投票することができた。ほかの投票所でも、同姓同名の人が二人いるというケースがあったが、ここの投票所では二人が一緒に来たため、問題はなかったということであった。最後

に開場を監視した投票所に戻り、投票所を閉める手続きを監視した。使用された投票用紙の数と投票に来た人の数が合わず、チェックをし忘れたケースがあった。また書類を記入している際に、開場からいた監視員はサインを求められたが、地域の監視員は投票所のスタッフが代筆して記入していた。全ての作業が終わったのは約 1 時間半後、そして物資は開票所にバイクで輸送された。

私が監視して回った投票所を通して考えると、投票所の運営についての不備や、投票所の物理的な問題がいくつかあった。たとえば、数え間違えや、同姓同名の人についての対応。列ができていないために先頭がわからない、優先される人に対して情報がない、その結果優先されていないなどがあげられる。そして、いくつかの投票所に共通してみられた物理的な問題がある。電気が通っていないので投票所内を明るくするために窓を開けたことが、「投票用紙記入の際の秘密が守られるか」というチェックリストにひっかかってしまったのである。しかし、投票を操作したり買収したりというような問題はみられなかった。また投票所によっては、拡声器を使って案内をしたり、理解できていない人にすばやく対応しているところもあった。

カンボジアの人たちにとって選挙というのはめずらしいお祭りのようなものだと感じた。おしゃれをして投票所に来たり、投票したあとに近くで集まってしゃべっていたり、アイスクリームや果物を売る屋台も出ていたりもした。投票所で何か問題が起こると、その場にいる人が皆集まってきて問題に集中した。野次馬のようにも思えたが、選挙にそれだけ関心があると私は思った。私たちの通訳さんは投票所を回るごとに、熱くなっていった。投票所で問題が起こっていると真っ先にその人たちの輪の中に入っていき状況を確認していた。彼は情報不足で投票できない人がいる、それは大きな問題だとよく言っていた。

28 日、開票は小学校で行われた。この開票所には 10 箇所から投票箱が届けられていた。私は投票箱二つを開票するチームの監視をした。マニュアルにのっとって、開票作業は進められていった。手際がわるいところもあったが、大きな問題はなく、順調に開票が進んだ。投票用紙を読み上げたのは、ずっと同じチーフであった。記録していくスタッフは二人で交代していた。私が監視したところは投票用紙の全体数も少なかったので、投票用紙の読み上げを開始してから、2 時間ほどで数え終わった。誰かが介入したり、投票用紙が盗まれるといったこともなかった。無事に開票が終わったという印象を受けた。投票と開票を通して、投票所のチーフによって差が出てくることが感じられた。チーフへの教育や、チーフの経験の差が手際の善し悪しをわけていたと思う。

コンポンスプーには 6 議席あり、投票の結果、今までは CPP が 4 議席、フンシンペック党が 2 議席だったが、今回の選挙で CPP が 4 議席、フンシンペック党が 1 議席と議席を減らし、新たにサム・ランシー党が 1 議席を獲得した。しかし、4 大政党と言われていた I.B.C は、議席を獲得できなかった。工場労働者の投票行動について COMFREL の女性は、残業などの問題はあるけれども、だからといってサム・ランシー党に投票する訳ではないと言っていた。労働者は 18 歳未満が多いのかもしれない、という考えもある。工場労働者等の多くはサム・ランシー党に投票するという噂があり CPP をおびやかす勢いになるのではないかという見方もあった。実際はそれほど CPP に得票率が近づいたわけではなかったがサム・ランシー党も 1 議席獲得したということで、工場労働者等の意見も少なからず反映されている。

4. デブリーフィング

28 日の開票を終えたあと、プノンペンに戻り 29 日にデブリーフィングに参加した。コンポンスプーチームは 4 人で発表することになり、私は自分の発表のことで頭がいっぱいだったので、ろくに話を聞

いていなかった。何とか発表を終えた後も、飛行機の時間が迫っていてあまり他の地域の方のお話を聞くことができなかったのが残念だった。

5. おわりに

カンボジアで気づいたことはたくさんありますが、感動したのは人間の目はものすごい機能を持っているということです。カメラに収まりきらない景色をこんなにも見ることができるなんて、と驚きました。私はカンボジアで見ることからたくさんのことを学んだ気がします。

最初から最後まで新しいことの連続で、たくさんのことを経験させていただきました。私は選挙監視活動だけでなく、インターバンドの除隊兵士支援活動の家庭も訪問させていただきました。こんなにたくさんの体験のなかで、私は物質があふれていることだけが豊かさではないのだ、ということを感じました。除隊兵士の家庭を訪問したとき山田先生とお話して、お金の面では貧しいけれども、家族の中で子どもがしっかり役割を持っているということを豊かと考えるか、ということを教えていただきました。

プノンペンの市内や、投票所や開票所など行った先々で、現地の人を見てたくましいと感じました。拙い英語やクメール後で話をする機会に恵まれたことも、私にとってすごく大切な時間でした。現地の人から刺激を受けるだけではなく、一緒に参加している監視員の皆さんからもすごく刺激を受けました。自分の視野が広がったような感じがします。新しい関心が増えてすごく良い出発点になりました。まだまだ勉強不足な私に、このような貴重な経験をさせてくださったインターバンドの方々に本当に感謝しています。ありがとうございました。